



長野県看護大学学報

発行：長野県看護大学渉外委員会 〒399-4117 長野県駒ヶ根市赤穂1694 Tel 0265-81-5100
ホームページ (http://www.nagano-nurs.ac.jp/)

サモア国立大学看護学部より交換留学生受け入れ



長野県看護大学は2001年にサモア国立大学 (National University of Samoa:NUS) 看護学部と学術交流協定を締結し、特にJICAの支援を受け、専門家派遣事業、NUS看護学部教員の研修受け入れなど、教員の研究交流を積極的に行っている。一例として、2001年より生活習慣病予防のための小児のライフスタイルに関する国際共同研究を推進し、2005年には国際看護師協会 (ICN) 4年毎大会 (台北市) において研究成果の共同発表が行なわれた。

NUSとの学生交流協定は本学の学部生カリキュラムにも活用されている。2004年度から臨地実習のなかで4年次に行なう総合実習(3単位)のプログラムのひとつとして国際看護実習を開講した。実習内容は、異なる文化背景を持つ対象への看護実践の場や看護の提供を通して、社会システムや文化背景の違いが対象者の健康や看護実践にどのような影響を与えるかを学び、異文化看護の実践能力を養うことである。実習への受け入れ学生数は2～3名、実習期間は約2週間である。

2004年度は本学から3名の学生と引率教員1名がNUSを訪問し、熱烈なる歓迎のもとに現地での国際看護実習を行なった。2005年度は、本学がNUSより学生を受け入れる番であり、2名を本学に受け入れた。これらの交流は、国内の外国籍居住者の支援、現地の人々の健康増進、看護の可能性を広げる研究の促進等に役立つだけでなく、学生や教職員の異文化理解に寄与し、入学志願者にとっても大きな魅力となっている。

目次

<巻頭ニュース>	
サモア国立大学看護学部より交換留学生受け入れ.....	田代麻里江 1
<看護実践国際研究センター・異文化看護国際研究部門>	
Emilia Mari Wako Sogumo氏講演「ブラジルの看護制度と日本での研修について」.....	前田 樹海 3
外国籍市民の看護支援プロジェクト：2005長野県外国人健診.....	田代麻里江・畔柳 良江 4
<教員活動報告>	
大規模自然災害に備えた看護職者のネットワークづくり.....	安田貴恵子 7
オーストラリアでのICM (International Confederation of Midwives) 参加報告	
・ICMに参加して.....	赤羽 洋子 8
・オーストラリア・ブリスベンの看護学部、病院、育児支援施設見学ツアー.....	黒田 裕子 8
・オーストラリアで感じたこと.....	北澤美佐緒 9
第10回国際言語学史世界大会に参加して.....	江藤 裕之 10
共同住居の設立にかかわって.....	赤沢 雪路 11
草の根のグレート・ボックス運動.....	江藤 裕之 12
<渉外委員会報告>	
第1回公開講座：内田雅代先生「慢性疾患をもつ子どもと家族のケア：子どもや家族の経験を聴きながら協働していくこと」.....	黒田 裕子 13
第2回公開講座：Grace Stanley先生「Nursing Education from an International Perspective」.....	吉田 聡子 13
第3回公開講座：田中建彦先生「英語になった日本語」.....	堀内 美和 14
大学説明：オープンキャンパス、鈴風祭における大学説明.....	藤垣 静枝 14
大学説明：高校での説明・模擬授業、高校生の大学見学.....	藤垣 静枝 15
国際交流：インドネシアから保健衛生グループ訪問.....	江藤 裕之 15
HP担当からの報告.....	太田 規子 16
<投稿>	
グループワークを通しての学生の学び.....	水寄 知子 17
<事務局よりのお知らせ>	18
<同窓会よりのお知らせ>	20

学生交換留学制度の概要

NUSとの協定による国際看護実習の履修学生は、学習意欲と英語能力の点から面接を行い選抜していることもあって学習の成果は高い。実習形態は、NUSとの合意のもと、双方の大学から派遣された学生が、受け入れ側の大学の学生とペアになって実習を行う方法（バディ・システム）を取っている。従って2004年に本学からサモアに学生を派遣した年度は、本学学生は3名で、現地ではNUSの4名の学生の看護実習グループに合流し、NUS学生とペアになって2週間の臨地実習を行った。サモアから学生を受け入れた本年度は、本学の総合実習で国際看護学を履修していた4年生の2名（久保裕樹さん、塩沢みのりさん）の学生がNUSからの2名の学生と一緒に、医療施設や地域での看護実習を2週間行った。

本年度、本学がNUSから初めて受け入れた留学生は、ファアレガ・マブさん（学部4年生）とヘンリー・テイラーさん（新卒看護師）の2名で、その期間は7月9日から23日までであった。本学では、これまでのNUS側の本学教員・学生の歓迎に応える意味でも、NUSよりはじめての留学生を迎えるに当たり、国際看護学講座、看護実践国際研究センター・異文化看護国際研究部門、渉外委員会を始め、全学の教職員学生が協力して盛大な歓迎会を催した。



【歓迎会の様子】

マブさんとテイラーさんの本学をベースにした研究スケジュールは以下の通りである。

9日(土)	中部国際空港到着
10日(日)	休み
11日(月)	大学授業見学・歓迎会
12日(火)	サモアと日本の看護観のディスカッション お茶会(学内・茶道部)
13日(水)	伊那中央病院見学・実習 カンファレンス(学内)
14日(木)	長野県立こども病院見学・実習 カンファレンス(学内)
15日(金)	記録・発表準備・中間報告会 学長主催夕食会
16日(土)	休み(市内観光)
17日(日)	休み
18日(月)	オープン・キャンパスにて紹介 学内施設見学
19日(火)	プラムの里(老健施設)見学 カンファレンス(学内)
20日(水)	実習記録

伊那市保健センター	1歳半健診見学
21日(木)	伊那市家庭訪問(訪問看護ステーション) カンファレンス(学内)
22日(金)	最終報告会 学生委員会主催「夏祭り」・壮行会
23日(土)	中部国際空港より帰国

2005年度学生交換留学の実習概要

実習では、本学とNUSの学生が4人で一緒に病院などの施設や看護実践場面を訪れ、見学やペアを組んで実際に看護を提供した。その後、学内で自分たちの観察や経験を振り返り、ディスカッションする中で、日本とサモアの看護学生の間でどのような共通の、あるいは異なる視点があるのかを互いに学びあった。また、それらの違いは、互いの国の地理・気候・環境・文化・社会システムなどのどのような要因が看護や看護の考え方に影響を与えているのかを分析した。

伊那中央病院では、小川院長ご自身による英語の院内ツアーを行って頂いた。細部にわたり計画的に建設された高度医療設備や医療機器を感心して見入るNUS留学生の姿があった。また、同病院の5階病棟で2人ずつのペアになって患者様を受け持ち、看護実践を行った。テイラーさんと久保さんが担当した男性は、テイラーさんらが来院することを事前に看護師から聞いており、英会話を練習して備えるなど交流を心待ちにし、テイラーさんと即意気投合されていた。

県立こども病院では、極小未熟児をはじめて目にした留学生の2人は、小さな命が育っている様子に目を見張っていた。



【共に看護実習をした4人
(左から)塩沢さん、マブさん、久保さん、テイラーさん】

介護老人保健施設のプラムの里では、マブさんとテイラーさんの来所を楽しみにしておられた入所者の皆さんの前で、サモアダンスを披露し大変喜ばれた。

2人は入所者の方々のお話しにじっくり耳を傾け、様々な理由で家族と一緒に生活することができない日本の高齢者の現状を学んだ。「サモアでは高齢者はとても大切にされているのに、日本の高齢者はあまりにも気の毒だ」と2人は涙を流して一緒に実習をした久保さんと塩沢さんに話していた。更に、伊那市の保健師さんのお計らいにより、4人は日本の一般家庭にも訪れる機会を得られた。



【プラムの里でサモアダンスを踊るマブさん】

実習から学んだ異文化の概念

一連の臨地実習を終えた後の学内ディスカッションでは、留学生の2人と本学の2人の学生の間で最も感心が集まった話題が、「家族」と「人へのもてなし」についてであった。いずれも看護に関わりの深いテーマであるが、サモアと日本の文化の違いから、その考え方が大きく異なっていた。例えば、サモアでは英語で「family(家族)」と言った場合、その範囲が広く、日本で親戚とする人々も含むいわゆる「一族」のような感覚で使用されていた。しかし、英語で「relative(親戚)」と言った場合、日本で考える核家族に加えごく近い親戚までを指しているようであった。このように同じ英単語を使って話していても、その意味するところが異なることを知り、学生たちは、文化を超えて相互理解を深める為には、言葉の概念を確認することから始める必要があることも学んだ。また、このような概念の違いは、当然ながら話し合いで合意に到達することはなく、互いの価値観の違いが、いかに文化的な背景に影響を受けており、無意識のうちにそれが看護実践にも影響を与えているということを、学生たちが学ぶ貴重な機会となった。なお、ディスカッションには、2004年に本学からNUSに派遣された3名の学生のうち2名(現在は卒業生して看護師)が、休暇をとって本学に駆けつけ加わり、留学生の2人を歓迎した。また卒業生たちは、サモアでの体験や学びを語るなど、後輩の育成にも一役買ってくれた。



【実習後のディスカッション風景】

留学生と本学学生の課外交流

社会的で天真爛漫なマブさんとテイラーさんは、実習外でも本学の学生たちから人気が高く、相互に活発な交流が行われた。2人が滞在していた構内の非常勤講師宿舎に隣接する学生寮からは、毎晩学生が訪れ、2人の部屋は常に

本学の学生であふれ返っていた。また2人は学生たちとバレーボールやソフトボールをし、ショッピングやカラオケを楽しんだ。サモアの人々の特徴として、普段より大家族の中で生活する傾向があることから、マブさんとテイラーさんも1人で寝ることを好まず、常に本学学生の誰かが交代で2人の部屋に寝泊りし、夜な夜な語り明かしていたようだ。また、サモアの人々は大変ダンス好きであるが、本学学生たちは2人の持ってきたCDに合わせてサモアダンスを教えて貰う機会もあった。

学長主催の夕食会には、マブさんとテイラーさんと共に教員と学生数名がともに招かれた。お寿司が大好きというマブさんは、立て続けにまぐろやえびの握り寿司を口に運び周囲を驚かせた。対照的に、テイラーさんは全く日本食が食べられず、ピザやフライド・チキンを好んで食べていた。夕食会の最後もやはりサモアダンスで締めくくられた。

出発の日は、多くの本学学生が集まり、マブさんとテイラーさんを大学で見送った。本学の学生たちは2週間前に留学生の2人に会った当初、英語での会話を恥ずかしがっていたが、2人と親しくなることで自然に英語でのコミュニケーションがとれるようになっていた。最後はみなで互いに抱き合って涙で別れを惜しみ合っていた。このように、本学で初めて迎えた留学生との看護実習と学生交流は、NUSと本学の双方にとって大変実り多きものとなった。

これからの学生交換留学

2004年から開始した学生交換留学制度は、2006年の夏も実施が予定されている。2006年度は、本学から再び3名の学生と1名の教員が派遣される。今年2月に学生の選考面接が行われ、選抜された学生3名は、6ヶ月の間、本学教員であるカナダ人のスタンリー教授より英会話の特別レッスンを受け、国際看護学の教員からサモアの文化や海外実習に向けたオリエンテーションを受けるなどし、海外派遣に備える予定である。

田代麻里江 (本学教員・国際看護学専任講師・異文化看護国際研究副部門長)

* * * * *

◆学報への投稿募集◆

学報への原稿を募集します。内容は、

- ◆近況報告:学術・社会貢献のニュース、出版、学会活動、学会参加報告、Conference Report、etc.
- ◆自由投稿:書評、本の紹介、写真、ミニエッセイ、etc.
- ◆お知らせ:勉強会、読書会、クラブ活動、サークル、etc.
- ◆その他:お便り、お知らせ、お勧め本、etc. などです。特に、教職員の活動報告を募集します。

異文化看護国際研究部門(IRC)

〔長野県看護大学国際フォーラム報告〕

ブラジルの看護制度と日本での研修について

講師：Emilia Mari Wako Sogumo 氏

2005年11月22日、Emilia Mari Wako Sogumo (宗雲 エミリア 真理 輪湖) 氏が来学し、「ブラジルの看護制度と日本での研修について」と題する講演を行った。

エミリア氏の本業は、ブラジルの企業に従事する産業保健専門看護師である。1988年から1989年にかけて長野県海外技術研修員として来日したのに引き続き、今回が2度目の日本での研修だそう。今回は2005年度長野県国際パートナーシップ事業で上田市を訪れ、その研修中に上田市で保健師として活躍している本学卒業生の高山鈴美氏と出会い、彼女の紹介により本学での講演が実現した。

長野県看護大学国際フォーラムは開学以来50回以上の開催を誇る。しかしながら、県内で最も多い外国人がブラジル人であるにもかかわらず、また、本学の位置する駒ヶ根市ではつい最近まで本場ブラジル人ダンサーを招聘して「駒ヶ根サンバカーニバル」を開催していたにもかかわらず、いままでブラジルからの講演者は皆無であった。今回、学生教職員合わせて30名もの聴衆がこの講演に参加したのは、よく見かけるけどあまり知るところのないブラジル人の母国における看護や、ブラジル人の考え方に触れたいという関心があったからと思われる。何を隠そう筆者もそのひとり。



〔講演中のエミリア氏〕

以下にエミリア氏の講演の内容をかいつまんで報告する。

エミリア氏は日系3世のブラジル人であるが、「あとから学んだ」という堪能な日本語による講演となった。まず、壁に貼られたブラジル製の世界地図、南米地図、ブラジル地図を参照

しながらブラジルの地理のおさらいから話は始まった。われわれは日本（太平洋）が中心の世界地図に慣れており、それが標準的な世界地図だと思っているが、ブラジル製の世界地図はブラジル（大西洋）が中心で、日本はというところ、極東という表現はこういう地図でないとなかなか実感が湧かないと思った次第。

ブラジルの看護教育制度は3年課程（専門学校）と4年課程（大学）が混在している点はわが国と似ている。しかし、産業保健分野に従事するためにはスペシャリスト教育を受けることが必須であり、専門学校卒業生であれば1年間の産業衛生学の教育を受けなければならない。また、大卒看護師は大学院等で2年間の産業衛生学を修め産業保健専門看護師（Occupational Nurse Specialist）となって

はじめて産業保健分野に従事できる。産業保健専門看護師は、専門学校卒業ベースの産業保健看護師を指導管理する立場でもあり、このあたりの業務範囲の明確化や専門看護師の位置づけがわが国とは決定的に違う。

ブラジルにおける産業保健専門看護師の仕事内容はひとこと言えば社員の健康増進であるが、その対象は社員のみならず社員の家族までが守備範囲であるという。それというも、社員がいきいきと働くためには、それを支える家族が無病息災であることが前提と考えられており、社員の健康増進を構成する要因の中に家族の健康がきちんと位置づけられているからである。もちろんわが国でも、被雇用者の加入する健康保険の中で扶養家族の医療費の面倒を見るという間接的なサポートは行なわれているが、ブラジル企業の社員に対する健康増進の考え方はわが国とは違うアプローチで行われているとの印象を持った。

エミリア氏の日本での研修目的は日本人の長寿の秘密を探ることと生活習慣病予防に関する知見を得ることであるが、日本人では到底気がつかないような鋭い観察が随所に現れていてたいへん興味深かった。食べるということひとつをとっても、たとえばブラジル人や米国人はおいしいから食べるけれども、日本人はからだにいいから食べるという価値観の違いがあるという。たしかにわれわれは食物に対して美味しいかどうかということに中心的価値を置いているかというところ、どうもそうではない。むしろ美味しいのは素材がいいからで、素材がよければ健康にも良いという考えを知らず知らずのうちに身に付けている自分に気づく。美味しいと思ってカップラーメンを食べていたとしても、頭のどこかでは「からだに悪いなあ」と思う自分がいたりするわけである。



〔講演後の記念写真(左から北澤、筆者、エミリア、高山、野坂)〕

このメンタリティが何に影響されているかというところ、結局健康教育に尽きるわけである。エミリア氏が講演の中で健康教育や健康増進活動の重要性を訴えていた真意もそこにある。長野県は長寿県ということで慢心してはいけない。彼女の「長生きするのは今から」というメッセージはイグアスの滝のように深く、強烈だった。

（本国際フォーラムは平成17年度日本学術振興会科学研究費補助金事業「女性の骨粗鬆症：リスク特性と症状の国際比較に基づく生活指導（研究代表者：前田樹海）」により実施されたものです）

前田樹海（本学教員・生活援助学講座助教授・異文化看護国際研究部門長）

2005長野県外国人健診

田代麻里江・畔柳良江

2005年度長野県外国人健診と本学の関わり

毎年恒例となってきた外国人健診が、今年も県内7箇所（長野市、佐久市、中野市、松本市、飯田市、茅野市、伊那市）で行われた。上伊那地域は、2005年12月18日（日）に伊那中央病院を会場として実施された。本学は、「外国籍市民の看護支援プロジェクト」の一環として、看護実践国際研究センターの異文化看護国際研究部門（IRC）が中心となり、2003年度よりこの健診の上伊那地区の企画と運営に当たってきた。また、毎年健診終了後に県全体の健診結果を統計的に分析するのもIRCの役割である。

今年度は、上伊那地区の事務局である本学IRCに、準備委員のメンバーとして学内から10名あまりの学生ボランティアが与えられた。事務局メンバーであるIRCの教員や駒ヶ根日本語教室のボランティア、学生準備委員は、6月より本格的な準備活動を開始した。

外国籍住民の医療サービスへのアクセスの現状

長野県には平成17年5月現在4万4,327人の外国人登録者が報告されている。県平均では、住民の50人に1人が外国籍住民という現状である。彼らの多くは工場などで働き地場産業を支え税金も納めており、一般市民としての責任を果たしている。しかし、自治体レベルでは財政難や人的資源の乏しさ等から、こうした外国籍住民のニーズに敏感な保健サービスを十分に提供できていないのが現実である。外国籍住民が日本の保健医療施設を利用する際、障害となるのが、

- 言葉
- 医療システムの違い
- 週日に休めない就労形態
- 高い医療費

などである。これらの問題から、外国籍住民は健康に不安を持っていても、気軽に医療専門家に相談することが難しい。知人に通訳を依頼して受診する人も珍しくないが、素人通訳者の語学力は様々で、そこにもまた問題がある。更に、日々多忙を極める医療者側も、時間をかけて外国籍住民に対応することができない現実がある。

このようないくつもの壁を取り払い、外国籍住民が気軽



〔受診者夫婦と付き添いボランティアの看護生、共同で問診票を記入しているところ〕

に健康相談できる機会を提供する為、県は委託事業「外国籍県民 心と身体の安心サポート事業」として、NGOに実施を託した。それがこの外国人健診である。受託団体は、北信外国人医療ネットワーク（NGO）であるが、県内7箇所での実施を可能にするため、各地で市民団体などが事務局となり準備や運営を行った。

外国人健診の特徴と内容

本健診では、「言葉」の問題を解消するため、問診票や健診結果表を10ヶ国の言語で用意し、各会場に主要な言語の通訳ボランティアを配置している。また「医療費」の問題については、健診費用を1,500円と安く抑え（15歳以下は無料）、「週日に仕事を休めない」外国籍住民に配慮し、健診日は7会場すべて日曜日に設定している。さらに「医療システムの違い」に戸惑う外国籍住民に配慮し、健診会場では、付き添いボランティアが受診者とペアになってエスコートするシステムをとっている。健診内容は、身体・血圧測定、血液・尿検査、胸部X線撮影、医師による診察、保健師等による健康相談、歯科健診である。



〔血圧測定を受ける受診者と看護師ボランティア〕

上伊那地区の健診準備活動

健診の宣伝活動として、毎年、10ヶ国語のチラシを作成して受診者を募っている。学生準備委員や事務局メンバーが手分けして、市町村役場、大型スーパー、教会、エスニック・レストランや食料品店、託児所、小中学校の日本語教室などに配布し、宣伝した。

日本人住民に対してもボランティア参加を呼びかけた。管内の自治体や外国人支援団体を対象に、当日の運営やボランティア募集の協力を依頼する説明会を6月に開催した。さらに、本学の学園祭や、JICA駒ヶ根訓練所の主催するイベント会場でも宣伝活動を行った。

医療や通訳ボランティアは、事務局メンバーのネットワークやNGO等を通じて、雪だるま式に知り合いを次々紹介してもらい、なんとか必要人数が満たされた。また、健診3週間前には、医療・通訳・受付など主要な役割を担うボランティアを対象に、会場となる伊那中央病院の講堂をお借りして、健診の説明会を開催した。その他、企画会議やチラシ印刷・配布、ボランティアへの通知発送、物品準備など、半年の間、学生準備委員のメンバーは膨大なテストやレポートの合間をぬって地道かつ精力的に活動してくれた。

受診者数とその内訳

今年度の7会場の受診者総数は407名であった。一昨年から昨年度にかけては、30%増し(476人)であったが、今回は昨年に比べ15%の減少であった。上伊那会場の受診者数は79名で、飯田会場の91名に次いで2番目に多い受診者数であった。南信2会場の受診者数を併せると全体の42%となり、昨年同様、県内では南信地域に、外国人健診のニーズが高いことが伺えた。受診者の出身国は、過去2年に引き続きブラジルが最も多く、約半数を占めており、タイ、フィリピン、中国と続く。これは、県内の外国人登録者数の主要出身国の内訳とほぼ一致していた。

2005年度 長野県外国人健診 受診者とその内訳

実施日	10/16	11/13	11/20	11/27	11/27	12/4	12/18	
国名/会場	長野	佐久	北信	松本	飯田	諏訪	伊那	合計
ブラジル	15	20	6	10	54	40	51	196
タイ	7	16	4	19	4	1	1	52
フィリピン		13	9	5	15	1	1	44
中国	1	5		12	15		9	42
ペルー							14	14
その他	20	17		13	3	3	3	59
合計	43	71	19	59	91	45	79	407

健診結果

受診者の平均年齢は34歳、平均滞在年数は6年で過去2年よりいずれも高くなっていった。男女比は女性が65%と例年より男女差のひらきが大きかった。受診者の7割以上が、なんらかの自覚症状(肩こり、頭痛、背部痛など)を持って受診しており、5割強が何らかの疾患の可能性があると指摘され、全体の3割強の人は、病院への受診が必要と診断された。可能性のある疾患で多くみられたのは、高脂血症、高血圧、肝機能障害、糖尿病などで、指摘された疾患件数の約7割が生活習慣病と呼ばれるものであった。また、18歳以上の4割近くの人が肥満(>BMI25)であることもわかった(以上、2006年2月15日現在の暫定分析結果)。

今回の結果も、過去2年と同様の傾向があり、外国籍住民も日本人の成人によく見られる慢性疾患へのリスクを抱えており、生活習慣病予防の対策が、外国籍住民にとっても重要な課題であることがわかった。



〔受診者とボランティアがペアになって受付に並んでいるところ〕

外国人健診を支えるボランティア

毎年多数のボランティアの方々によって運営が支えられ

ている。今年度は、7会場あわせてのべ714名のボランティアが健診に参加した。うち医療ボランティアは151人、通訳ボランティアは113人、そして受診者のエスコートや受付等を担当する一般ボランティアは450人であった。

上伊那地区のボランティア

上伊那会場には138人のボランティアが参加し、そのうち本学からは学部生・大学院生あわせて56人、教員7人が参加した。看護免許を持つボランティアの参加も多く(29人)、会場の各部署でリーダーシップを発揮した学生準備委員の活躍とともに、健診のスムーズな運営を可能にした。

今年度の特徴としては、管内からの一般の方のご参加に加え、あらたに医師、看護師、保健師としてはじめて参加して下さった方が増えたこと、そして、休暇をとって駆けつけてくれる本学の卒業生(看護師・保健師)が増えてきたことであった(5人)。さらに、今年度で3回目となるが、会場をお貸し頂いた伊那中央病院の小川院長の深いご理解と、総務課、医事課、検査部門の職員の方々の影のお力に支えられていることを実感した健診であった。

また、本学3年生の選択科目「国際看護論」では毎年、履修生が授業の一環でボランティアとして参加し、異文化体験をする貴重な機会を載っている。今回はじめて参加した学生から次のような感想があった。

- すごく多くの外国人が上伊那に住んでいることを知り驚いた
- 日本語が話せても読み書きできない人がいると知った
- 自分は身構えていたけど、外国人の方が自然体で話しかけてくれて嬉しかった
- 外国人と話しをする中で、食事や習慣など日本人とずいぶん違うことを知り、日本の常識が通じないことを学んだ
- 受診者の方が不安そうな顔をされていたが、ゆっくりとした日本語とジェスチャーで通じたのか安心された

受診者のアンケート結果より

上伊那会場の受診者60名(約8割)から回答があったアンケートによると、チラシによってこの健診を知った人が8割以上で、苦労してチラシを配布した効果が伺えた。また、受診の理由は、「自分の健康状態を知りたい」が最も多く(4割)、次に「平日でない(日曜日である)から」が多かった(2割)。会場のボランティアに対する評価は例年同様高く、8割以上の方が「対応が良かった」としていた。回答者のうち約6割が外国人健診を過去に受けたことがあり、9割の人が本健診を「来年も受けたい」と答えていた。これらの回答から、受診者の外国籍住民の多くは、本健診に対して好印象を持っており、毎年頼りにしている人が増えている様子がわかった。

外国人健診のもう1つの目的

本健診は、単なる健診ではなく、地域の日本人と外国人が歩み寄る機会を提供するのも大きなねらいである。外国籍住民と日本人ボランティアが言葉を交わし、お互いを知ろうと努力する中で、多くの人がそれまで持っていた固定観念が払拭される体験をしている。まさに「アイ・オープニング体験」である。また、外国籍住民にとっては、本健診では「お客様」として迎えられ、「外国人」であることが喜ばれることを知る。それは、普段異国の地で差別を感じつつ生活している彼らにとって、自分の価値を再認識する大切な機会になるかもしれない。

健診システムそのものの見直しや、受診者のフォローアップ体制の確立など、外国人健診の課題は残されているが、3回の実施を終え、過去の課題であった「地元の方々のボランティア参加を増やすこと」は感謝なことに克服されつつある。

外国籍住民の孤立化を防止し、日本人の内なる国際化を促して、誰もが安心して住める平和な地域社会をつくるために、本健診が少しでもお役に立つことを願ってやまない。

最後になりましたが、上伊那会場の健診にボランティアとして参加して下さい、地域の皆様、本学学生および教員の皆様に心からお礼を申し上げます。

読者の皆様、2006年の外国人健診に、是非ご参加下さい。そして一緒に活動致しましょう！



〔2005外国人健診上伊那地区事務局準備委員のメンバー〕

後列左から：著者、前田(2年)、畔柳(教員)、林(駒ヶ根日本語教室)、藤本(2年)、熊谷(2年)、北川(2年)
前列左から：笠井(1年)、馬場(編1)、高橋(1年)、澤田(1年)
写真なし：北原(卒業生)、芝崎(編2)、水口(編2)、深井(2年)

2006外国人健診ボランティア・お問い合わせ先

長野県看護大学

看護実践国際研究センター・異文化看護国際研究部門
『外国籍市民の看護支援プロジェクト』担当

- ・田代麻里江(国際看護学講座)
- ・畔柳(くろやなぎ)良江(生活援助学講座)

Tel. & Fax: 0265-81-5153 / 81-5162

E-mail: irc-gaiken@nagano-nurs.ac.jp

田代麻里江(本学教員・国際看護学専任講師・異文化看護国際研究部門)

教員活動報告

〔教員活動報告〕

大規模自然災害に備えた 看護職者のネットワークづくり

安田貴恵子

長野県南部地域は、東海地震発生時に大きな影響を受けると想定されています。長野県看護大学のある地域にも、活断層があることが報告され、いつ大地震がおきても不思議ではない状況です。

長野県飯田保健所では、地域保健総合推進事業「大規模災害や新感染症等における健康危機管理体制の構築と保健所機能の検討事業(全国保健所長会協力事業 平成16年度～18年度)」に参画していることから、大規模自然災害に備えた医療・保健の準備体制を整える活動に精力的に取り組んでいます。その取り組みの一環として、平成17年度に飯田保健所保健衛生ユニットリーダーならびに阿南支所長(いずれも保健師)が中心となって災害発生時の看護体制検討会を立ち上げ、災害に備えた準備状況調査と研修を実施しました。私も検討会の一員として参加させていただき、この地域の災害看護について考える貴重な経験となりました。お伝えしたいことは沢山ありますが、ここでは、本学を会場にして11月24・25日に行われた、「大規模(自然)災害時の看護体制研修会」(以下「研修会」)について報告します。

飯田保健所が管轄している地域は、ほとんどが山間部で天竜川という大きな河川も流れています。そのため、災害時には、交通が寸断されて村や集落が孤立してしまう可能性が高く、初動期の支援体制を伊那保健所と諏訪保健所の医療圏も含めた広域的な範囲で考えています。また、看護職どうしの協力を考えると、病院、老人施設、訪問看護、行政などいろいろなところで看護職は働いていますが、職場の種類が違うとお互いを知る機会がほとんどありません。そこで、調査ならびに研修の対象には、病院、有床診療所、介護老人保健施設、訪問看護ステーション、市町村、教育機関を含めました。

研修は2日間に渡り、プログラムは、災害の準備状況調査結果の報告、初動期の看護活動の備えに関するグループワーク、災害時の心のケア、NPO法人阪神高齢者障害者支援ネットワーク理事長の黒田裕子氏の講演、ディスカッションという内容の濃いものでした。当日は、91施設から178人が参加して活発な意見交換が行われました。平成17年の朝日賞を受賞されている黒田裕子氏の講義では、震災の体験と援助活動の体験に基づく具体的な内容を話していただきました。情熱とエネルギーに満ち溢れた講義は、聴く者を突き動かすパワーを持っていました。前日のグループワークで初動時に動けるためにどんな準備が必要かと話し合った参加者にも、“さっそく明日から何か始めよう”と思わせるものでした。

最後のディスカッションでは、行政の保健師の話の聞き

て災害に備えた活動をしていることを初めて知った、このような機会をもってほしいなどの意見があり、異なる職場の看護職が交流できているようでした。また、研修アンケートでも災害看護への意識が高まっていることが確認でき、研修の目的は達成できたと評価できました。



〔グループワークでは、活発な意見交換が行なわれました〕

私自身がこの研修に参加して感じたことは、災害看護というと、災害が発生した時のものと捉えがちですが、在宅療養者に災害時の対応方法や薬の備えをアドバイスするということ、普段の看護の中で災害を常に想定しておくことが必要だということ、災害が発生して通常的生活システムが機能しない状況では、食べる、排泄する、眠るという基本的な生活行為が重要であり、被災者にとってのほんとうに役に立つ「援助」を行なうためには創意工夫が求められることを実感しました。

看護協会の研修でも災害看護に関することが企画され、関心は高まっています。また、地域の方と話をしても、災害時のことは話題に上がってきます。この取り組みをきっかけにして、わかったことや顔見知りになった人間関係を活かして、できるところから災害看護について考え、行動していけたらよいと思います。行動していけば、災害看護だけにとどまらない広がりの可能性もありそうです。

(本学教員：地域看護学講座教授)

〔教員活動報告〕

オーストラリアでのICM (International Confederation of Midwives) 参加報告

赤羽洋子・黒田裕子・北澤美佐緒

・ICMに参加して：赤羽洋子

2005年7月24日～28日にオーストラリア、ブリスベンで27th Congress International Confederation of Midwives (以下ICM) が開催されました。出発日、千葉を中心とした地震の影響で、私たちの乗っていた電車が止まってしまうというハプニングに巻き込まれ、空港に着いたのは、フライト時間を過ぎてからでしたが、何とか飛行機に乗れました。出発から珍道中だったことは、いうまでもありません。

到着した日の夕方から、Opening Ceremonyがあり、浴衣で参加しました。助産師というだけで、皆との一体感を感じ、握手にhugにといったことが絶えませんでした。

翌日からは、朝一で基調講演を聞き、その後各セッションに分かれて発表を聞いてまわりました。行く会場のほとんどが、たくさんの助産師たちであふれ、立ち見が出る会場ばかりでした。そんな中で、私も辞書を引きながら勉強してきました。



〔Opening Ceremonyにて：左から3番目が筆者〕

ICMに参加して、毎日の息抜きになっていたのが、“morning tea” と “afternoon tea” の時間です。オーストラリアはイギリス文化の影響を受けているので、tea timeが必ずあるとのこと。毎日、スコーンやクッキーといったおやつが出てきて、英語漬けで頭がボーっとしてしまう私には癒しのひと時でした。ただボーっとしていても、他の国の方とお話しをすることもしばしばあり、本当に脳を休めていたかはギモンです。

今回ICMに参加して感じたことは、すべての助産師たちは、世界中のすべての女性が、心身ともに健康で生き生きと生活することを願い、それを実現するために、何かしらのお手伝いをしているということ。活躍・活動の場は皆それぞれ異なりますが、目指すものが同じで、同じ職業というだけで、熱く語れる集団があるというのはとてもいいことだと思いました。また、私自身そのことを実感でき、貴重な経験となりました。次回は2008年、スコットランド・グラスゴーです。皆様参加されてみてはいかがでしょうか。

(本学教員：母性看護学講座助手)

・オーストラリア・ブリスベンの看護学部、病院、育児支援施設見学ツアー：黒田裕子

私たちは、ICM (International Confederation of Midwives) に参加後、クィーンズランド工科大学 (Queensland University of Technology、以下QUT) の看護学部見学、病院見学 (Royal Brisbane Women's Hospital Birth center and Maternity ward) 育児支援施設見学 (Early Feeding Support Clinic) の機会を得ることができました。簡単ですが紹介します。

QUT学内小会議室にて、オーストラリアの看護教育や児童虐待についての取り組みの講義を伺いました。オーストラリアでは、1984年から大学教育になったとのこと。英国とおなじく大学教育は3年です。助産師資格取得には更にもう一年かかります。オーストラリアの助産師は看護

職の中で0.9%だそうで、日本とそんなに比率は変わりません。



〔School of Nursing, QUT〕

オーストラリアでは看護師の高齢化が問題になっています。現在看護職の平均年齢は42.2才。若い人は海外、特に英国に多く働きに行っています。原因のひとつは給料が安いこと。初年度500万円ぐらいなのですが、イギリスに行けば飛行機代は出してくれるし、給料もよいとのこと。代わりにアジアから働きに来ているそうで、日本からも是非勉強にきてほしいと誘われました。オーストラリアでは、看護資格は終身ではありません。5年に一度申告が必要です。更新料は72オーストラリアドル日本円で6,500円ぐらい。再登録、再教育は6ヶ月で1,000オーストラリアドルかかるとのことですから、申告漏れをしたら大変です。

次の日は、Royal Brisbane Women's Hospital Birth Center and Maternity Ward を見学しました。クィーンズランド州でのお産はほとんどここで行われます。年間5,000件という数をこなしています。そのうちの約450件をBirth centerで分娩を取り扱っています。そこは家族が食事を作ったりできるキッチンがあったり、水中出産の写真など写真が廊下に貼ってありアットホームな感じです。分娩室は5部屋あるのですが、あいにく見学の日はいっぱいで中まで見るのができず残念でした。



〔Royal Brisbane Women's Hospital〕

医師が中心で取り扱う分娩室は10室あって、そちらのブースでも分娩台の上で必ずお産しなければならないわけではなく、好きなように立っても座ってもお産してよいと話されていました。医師が中心といっても、異常がなければこちら助産師だけで分娩を取り扱うことが多いそうです。病院全体では、助産師は120人ぐらいで、30%が無痛

分娩で、帝王切開率は28%。本当に帝王切開が必要な人は14%で、あとの14%は希望の帝王切開だそうです。正常産は半分以下ということになります。

産褥入院は3-4日で、退院後5回ぐらい病棟の助産師が家庭訪問に行くとのこと。この広いクィーンズランド州でどうやって家庭訪問をしているのでしょうか。スタッフはいそがしそうでもとても早口でしたので、遠慮して聞けませんでした。

この病院は一階と二階が吹き抜けになっており、広くてきれいです。フードコートがあっておいしいカレーをいただきました。

最後の日にはChild Health Service, Early Feeding Support Clinicを訪問しました。若い両親に子育てを指導する施設です。実はこのクリニックに行くのにずいぶん道に迷ったのですが、近くの人に聞いても、知らないこと返事をするのです。虐待や、DVに関わる施設であるという関係で、所在を公にしていない感じでした。普通の住宅街に普通に建っていました。ここは、母親と子どもだけでも入所できますし、両親と子どもとで入所することもできます。子どもとの遊び方、寝かしつける方法、離乳食の作り方、入浴方法を2週間ぐらいかけてトレーニングします。オーストラリアでは、10代の夫婦が21%とのことでした。

全行程で10日間ほどの滞在でしたが、カフェなどは夕方4時ぐらいには店じまいをはじめ、5時にはみんな自宅に帰ってしまいます。オーストラリア人は、必要なだけ働いてあとは自分のために時間を使うのだそうです。日本人は長時間忙しく働いて、うつ症状の人が急激に増えて問題になっています。オーストラリアをもう少し見習ったほうがいいかもしれません。



〔Child Health Service Early Feeding Support Clinic: 一番右筆者〕

(本学教員: 母性看護学講座助手)

・オーストラリアで感じたこと: 北澤美佐緒

2005年の夏、ICMに参加するため、オーストラリアのブリスベンに行ってきました。オーストラリアは冬を迎えていました。と言っても、ブリスベンは比較的暖かい地域だったので、日本の秋ぐらいの気候で、過ごしやすかったことを覚えています。ブリスベンは、とても安全できれいな街でした。ゴールドコーストの近くで、多くの観光客

(特にアジア人)が居ました。街の中心にはクイーンズ・ストリート・モールというショッピングモールがあり、カフェやレストラン、ギフトショップ、デパートなどが並んでいました。ICMの会場へは、毎日そのモールの中を歩いて出かけました。開店時間が妙に早く、朝8時30分くらいにはほとんどのお店が開いていました。ですが、その分、閉店時間はものすごく早く、17時頃にはファーストフード店ですら閉店してしまいました。レストランも早々閉まってしまうので、夕飯は閉店ギリギリで買ったお惣菜やファーストフードがほとんどで、せっかくの旅行なのに、なんだか切ないお食事でした。思い出してみると、オーストラリア特有の料理というものに出会わなかったように思います。朝飯は、ホテルのレストランでパン、ベーコンエッグ、サラダ。ランチはICMの会場で出されたチキンサンドや、カフェで食べたパスタ。アジア料理のお惣菜もたくさん食べました。あれ？やっぱりオーストラリア特有のものではありませんね。ところで、オーストラリア特有の料理って何でしょう。アボリジニーの料理ですかね。けれど、アボリジニー料理が食べられるレストランがありませんでした。では、カンガルーの燻製？でも、きっとカンガルーの燻製は伊那で言う「ざぎむし」や「蜂の子」みたいな存在だと思うし…。と考えると、実はオーストラリア特有の料理ってほとんど無いのかもしれない。色んな文化が混ざっているのがオーストラリアらしさなのだろうと、胃袋で感じた旅でした。

もちろん、ICMや大学・病院見学を通して感じることもたくさんありましたよ。ですが、今回は、現地に行ったからこそ感じられたことをご紹介します。皆さんもぜひ機会があれば、オーストラリアに行ってみてくださいね。



ちなみに、上の写真はカフェで「アイスコーヒー」と注文したら出てきた品です(手前)。クリームたっぷりのコーヒーにソフトクリームが乗っちゃってます。しかもサイズは、日本で言うLサイズ。びっくりの「アイスコーヒー」でした。オーストラリアの文化なのか、あのカフェ限定の文化なのかは検証できていませんが…。

(本学院生：博士前期課程)

〔教員活動報告〕

第10回国際言語学史世界大会に参加して

江藤裕之

「学問としての英文学とは何か」と問われ福原麟太郎は「それは英文学史である」と言い切ったそうである。また、哲学を勉強する人にとって哲学史は重要な意味を持つ、というより、それは必須である。哲学では、時間的に新しいものが必ずしもすぐれているとは言えない。ギリシアの大哲人アリストテレスの意味をヨーロッパ中世で発見したのはトマス・アクイナスであり、20世紀におけるトマス研究の第一人者はヨゼフ・ピーパーであるが、そのピーパーを研究している「私」は結局アリストテレスより「偉い」というばかげたことはないからである。

言語学は人文学なのか、自然科学なのか、あるいはこういった分類すら意味のないことなのか。それは、研究者の立場によって異なるものであろう。しかし、いかなる立場であれ、学史を押さえておくことは必須ではないだろうか。自分が「大発見」したと思っていることが、実は何百年も前にそのアイデアは存在していたなどという悲喜劇が起こらないためにも。

今日、人間の知的精神史から見た言語学の歴史を主軸にした学会が、イギリス、ドイツ、フランス、イタリア、北米などに存在する。それぞれの学会が大会やコロキウムを各国で毎年行っているが、3年毎に世界的規模での言語学史学会 (ICHoLS: International Congress of History of Linguistic Sciences) が行われる。前々回はパリ、前回はサンパウロ、そして今年がその開催年に当たっており、9月1日から5日にかけてイリノイ大学Urbana-Champaign校で開催された。これは、数百名以上もの学者があつまる大規模なものであり、多数の発表、シンポジウム、ポスターなどのセッションが行われた。

イリノイ大学Urbana-Champaign校は、シカゴから車で3時間ほどの所にある。イリノイ大学はシカゴにもキャンパスを持つが、Urbana-Champaign校が本部となっている。アメリカ中西部の大学のキャンパスは途方もなく広いが、ここもご多分に漏れず本当に広大なものだった。街の中に大学があるのではなく、大学が街を形成しているのだ。途中までのドライブは一面がコーンフィールドである。そしてまっすぐなハイウェー。本当に大学に着くの？と言うくらい不安なドライブであった。

学会は、5日間にわたるものであった。パリやロンドンなどで開催されれば、参加者も適当に聞きたい発表を選択して、後は適当に街の散策などに繰り出すのだろうが、ここではそういうわけに行かない。もっとも、一面のトウモロコシ畑を見たいなら話しは別だが、キャンパスの外には何もないのである。そこで、真面目にセッションに出ることになる。勉強するにはある意味、アメリカの中西部あたりの大学はいいのかも知れない。サボろうにもサボる場所がない。

筆者は、Language Study and National Identity : Koku-gaku (National Learning) Movement of 18th-century Japan and Its Intellectual Parallelism with Philology of 19th-century Germanyという題目で発表した。日本の国学者（特に本居宣長）の言語観と19世紀ドイツのフィロロジスト達の言語観の類似性を述べ、その背景にある知的並行性を指摘したものである。20～25分の発表で、5分程度の質疑応答がつくというものである。理系の学会ではどうかすると持ち時間10分と言うものがあるらしいが、文系では短くても20分、長ければ40分くらいはある。そして、多少、時間が延びても数あるコーヒー・ブレイクで調整ができるので、ディスカッションの時間を短くするようなことはない。その意味で、じっくり聞くというのが筆者の経験してきた海外の学会である。

いろいろな参加者があったが、いつものことながら何よりも感心するのは、大御所と呼ばれるような先生が、やはり自分の発表をし、若い学生と丁々発止とやりあっていることだ。大御所だからといって踏ん返り返って、若い人の揚げ足取りのコメントに終始するようなことはない。そして、毎度のことであるが、コーヒー・ブレイクと食事には意味がある。学会で人の発表を聞いて質疑応答するよりは、このようなinformalな場での語らいの方が、むしろ刺激を受けることも多く、実際、「ケアの東西比較」に関して、新しいプロジェクトをやろうという話に発展した。言語学の学会に行っておきながら、「ケア」とはこれいかに、と思われる方もいるとは思いますが、共通の関心は「人間」である。

フランスからの参加者と妙に仲良くなり、妙なFranglaisでワインの情報を得たのは有意義だった。もちろん、これが主目的ではなく、あくまでも副産物ではあるが。

(本学教員：外国語講座助教授)

〔教員活動報告〕

共同住居の設立にかかわって

赤沢雪路

駒ヶ根市で活動しているボランティアグループ“メンタルケアほほえみ”に、「伊南地区に精神障害者のための共同住居を立ち上げましょう」と、保健所から話があり、本学で厚生補導員をされていた松崎澄子さんが中心となって、立ち上げ準備が始まったのが3年前。

当時、伊南地区には、県立・私立の精神病院が運営され、ベッド数が500床あるにもかかわらず、援護寮が20床、グループホームが6床しかなく、精神障害者の地域生活を支援する資源そのものが、とても不足していました。長期入院者のほとんどが、病状は落ち着いているのに家族が亡くなって帰る先がないなど、社会的入院を余儀なくされていました。「この現状を何とかしなくては！」と、精神障害者家族会や保護者会の方々と一緒に、設立のための寄付金集めが始まりました。

本学の教職員も含め、駒ヶ根市民550人あまりから寄付

金をいただき、「応援するから頑張っ」て」という声に、支援スタッフはとても励まされたようです。

精神看護学講座にも設立の協力依頼があり、共同住居を設立し、精神障害者を地域で支えるための団体、“NPOメンタルサポート駒の杜”を立ち上げる準備に関わらせていただきました。各教員が、NPOの役員、会員として参加しながら、スタッフ研修や講演を行うといった後方支援をし、平成17年2月に、NPOとして長野県知事から認証され、同年9月に、精神障害者共同住居「こまの杜飯坂」を開所することが出来ました。

「地域で普通に暮らしたい」「ここから仕事に行きたい」という思いを抱き、共同住居への引っ越しが始まり、現在、4名の方が入所され、それぞれの部屋で生活しています。

共同住居から職場に通い、帰ってきてから掃除をしたり、世話人さんと一緒に夕食作りをする人もいれば、昼間はデイケアに通い、夕方は夕飯作りの買い物に行き、一緒に食事作りを手伝う人、朝、誰よりも早く起きて、ダイニングの暖房を入れ、当直者の分も含め、全員分の朝食を準備しておく人など、それぞれの生活スタイルや役割が少しずつ出来てきました。

今までは、分からないことや困ったことがあったとき、傍にいる医療職者に聞くことですぐに解決したことも、出来るだけ入所者同士で話し合い、解決していくこともしています。

共同住居を立ち上げる際、「地域の方が受け入れてくれるだろうか」という心配をしていたのですが、組長さんが世話人になって、夕飯作りをして下さったり、「家で出来たものだから皆で食べて」と、野菜や果物を持ってきて下さる方もいたり、地域の方の温かい見守りによって、入所者全員が支えられています。

入所者も地域の会合に参加することで、地域住民のメンバーとしての役割を学ばせていただき、精神障害者に対する理解を深めていただこうとしています。

こころの病いは、誰にでも起こることです。特別な病気ではありません。病いはあっても、自分らしく生きたいという人たちが生活しています。ぜひ、気軽にお茶を飲みに来てください。知ることから理解が始まるのですから。



〔こまの杜飯坂の全景〕

(本学教員：精神看護学講座助手)

草の根のグレート・ブックス運動

江藤裕之

久しぶりに知的に感動した。

この10年ほど、神奈川県の外郭団体K-FACE（かながわ学術研究交流財団）のプロジェクトで、名著を読み、そこから学ぶという「グレート・ブックス・プロジェクト」をお手伝いしている。モデレータを中心に、参加者がテキストの内容を討論し、その理解を深め、テキストの背後に隠れている普遍的な問題（グレート・アイディアズ）に触れるというのが中心である。そのセミナーのプログラムを作成し、実際に大学生を中心としたパイロット・セミナーを開催してきた。最近では、そのセミナーに参加してくださった方の応援を得て、神奈川県立図書館をはじめ、公共の機関を使用したセミナーや、あるいはまったくの自主的な集まりによるセミナーが開催され、名著を読み、名著に学ぶという余暇の過ごし方が少しではあるが実践されてきている。単なる読書会とは異なるグレート・ブックス・セミナーについての詳述は別項に譲るが、最近、高校生を対象としたセミナーを開始し、実に愉快的な経験をした。

平成17年3月に将来国際社会に羽ばたく高校生に幅広い内容の学びの場を提供することを目的に、かながわ学術研究交流財団では「第1回湘南国際村青少年国際セミナー（K-PIT）」を開催した。ここでは「世界の入り口に立とう」をテーマに、専門家による講義に加え、参加型学習の手法が随所に取り入れられ、異文化理解や「豊かさ」について、そして安全保障の問題まで多彩な内容が実施された。セミナー終了後も参加した高校生たちが自主勉強会のグループやボランティア団体を作るなど、さまざまな分野での国際的な支援活動を開始している。このようなセミナーでは参加者に一時的な刺激を与えることはあっても、それがなかなか「実行」として持続しないものであるが、その意味で今回の青少年国際セミナーの成果は大きい。

このプログラムのひとつに「グレート・ブックス・セミナー」の手法を用いたセッションが加えられ、国際的に活躍する人材に相応しい教養とは何かについて考える場を持った。そこでは、目に見えないものを「考える」ことの意味、言葉遣いの大切さ、読書（古典に接すること）による人間的成長などがテーマとなった。グレート・ブックスのセッションでは、限られた時間内で書物を1冊読んで討論することは不可能なので、「目に見えないものの価値」や「古典に触れることの意味」を少しだけ体験し、知的な刺激を与えることを目標とした。参加者の中から少しでも古典と呼ばれる書物を紐解いてくれれば良いという期待とともにセッションを終えた。少ない時間で多くのことを盛り込みすぎた内容だったので、参加者から「大切だということは分かったが、今ひとつ十分理解したとはいえなかった」というリアクションが多くあった。担当者としても、2時間程度の時間で、一度に60人の参加者を相手にするのだから十分な

対話もできず、一方的な講話のような形になりやはり消化不良だった。

すると参加者の数名から「もう一度、やってみたい」とのリアクションがあり、高校生を対象としたグレート・ブックス・セミナーが開催された。9月のある日曜日、当初午後1時から4時までの3時間の予定であったが、実際には5時近くまで討論は続いた。参加者は5名。討論をじっくりやるには理想的な人数である。

テキストにプラトン『メノン』（藤沢令夫訳、岩波文庫版）を選んだ。いくつか理由があるが、第一にそれほど分厚い本でないということと、内容が対話からなり、それほど難しい用語が使われていないという点だ。最初から大著に挑戦するのも意味のあることだが、まずは全体を読んでみて、ひとつの達成感を味わうということも入門段階では大切ではないかと思う。そして、『メノン』はソクラテスの対話編の手法、つまり、様々な質問を通して相手の論理的な矛盾を突いたり、自分の無知を悟らせるというソクラテスの手法—産婆術—が見事に展開されており、ダイアログとは何かを知る意味でも最適の入門書といえる。さらに、目に見えないものの価値を問う意味、自分の知らないものの探求することの意味、ものの本質を問う意味、といったことがテーマとして取り上げられていることから哲学の精神にじかに触れる思いがするのではないだろうか。

セミナーは、簡単な自己紹介の後、できるだけ対話ができるようにという配慮から、いきなりテキストの内容には入らず、参加者それぞれの読書体験や本を読むことの思いなどを語ることから始めた。そして、「考える」ということはどういうことか、「考える」ためには何を道具として使っているのか、など自由に討論したのち、テキストの内容へとシフトしていった。

『メノン』はご存知のように、「徳」という問題について、それが「人に教えることのできるもの」か、あるいはそうではなく「訓練によって身につけられるもの」かというメノンの問いたてで始まる。それを問われたソクラテスは、「徳とはそもそも何であるか」という問題に置き換え、「徳」の概念規定が始まる。そして、メノンは次々とソクラテスの質問にやり込められ、ついには行き詰ってしまう。第1回のセミナーでは、テキストのすべての内容を吟味し、そこから討論へと導くことは時間的に無理であったので、まずはこの第一の問題設定について考えてみた。つまり、「人に教えることのできるもの」と「訓練によって身につけられるもの」とはどのように違うのか、また、どうしてソクラテスはそういった問いを徳の本質の問題へと摩り替えていったのか考えて見たのである。

もちろん、こちらはあらかじめ正解を用意して、それに参加者を導こうとするものではない。それはグレート・ブックス・セミナーにおいては禁じ手である。このセミナーで大切なことは、考えの異なる人との対話を通じて、よりテキストの内容を正確に理解することなのだ。すると、参加者から、「人に教えることのできるもの」とはつまり言語化

できるものであり、「訓練によって身につけられるもの」とは言語化できないもの、であるという指摘があった。そこで、言語とはいかなるものかという議論へと進み、それはコミュニケーションの手段であると同時に、外界を認識する手段でもあり、また人間の共通認識を伝え、ひとつの文化として保存する役割を持つものであるという点まで話しが広がった。

筆者は、大学で英語を教える傍ら、大学院の一般教養科目として言語学を教授しているが、今回の高校生とのグレート・ブックス・セミナーほど知的に刺激を受け、また感心したこともなかった。高校生は、言語学の学説史や理論を詳しく知るものではない。むしろ、何も知らないというよい。しかし、しかるべき質問を投げかけ、それに対する応答を繰り返していくうちに、そこに現れてきたのは、ソシュールの言語観であり、フンボルトやサピアのそれであった。今回のセミナーでは、自分で言うのもおこがましい限りではあるが、ダイアログ式の、つまり「魂がかつて見てきたものを想起させる」という手法が本当に可能なのだという意を強くした。高校生の参加者の諸君が、対話の中で、実に見事な言語学の理論を展開させていくさまは感動的であった。

実は本学でもこのような「古典に学ぶ」サークルを立ち上げたことがある。ただ、そのメンバーの一人は他大学へ移り、残りのメンバーは休職中であるので、現在休止中となっている。本学でも、地域貢献の一環として、また図書館の活性化の一環として是非このプログラムを取り入れてみてはどうだろう。必ずしも本学の教員がモデレータをやらずとも、大学院生や図書館司書の方にも応援していただければ全学的な意味での社会貢献となるがいかがだろうか。

(本学教員：外国語講座助教授)

* * * * *

渉外委員会報告

平成17年度第1回公開講座：平成17年7月16日土曜日

慢性疾患をもつ子どもと家族のケア： 子どもや家族の経験を聴きながら協働していくこと

講師：内田雅代先生（小児看護学講座教授）

慢性疾患をもつ子どもと家族のケアにおいては、慢性疾患をもちながら地域で生活する子どもの日常生活や子どもが経験していることを理解することが援助の基本である。

たとえば、調査の中で、インシュリン自己注射のI型糖尿病の子どもたちが学校のトイレで隠れて注射をしたり補食をしなくてはならない状況があきらかになった。その子らしい生活を送るためには、子ども自身が「自分で考え行動する」力をつけていくことももちろん大切だが、子どもや家族をとりまく周囲の人々の理解と協力が欠かせない。

同じ調査の質問紙によれば、高血糖の場面では子どもたちは「怒られる、責められる」ととらえており、親は子どもの気持ちを理解しにくく、対応に困難を感じていた。専門職者たちは、子どもや家族に関わり一緒に相談しながら

行う直接的なケアとともに、家族の考え・気持ちを確認し、子どもを取り巻く環境を整えるために子ども・家族と専門職者が協働する新たなシステム作りに取り組むことが大切である。周囲の人々がどのように関わるか、どのように子どもや家族の環境を整えられるかについて、医療に携わる私達の役割が求められている。



本公開講座には、42名の看護専門職者を中心とする参加者がおり、「家族や子どもに接する上で忘れてはいけない事を再確認した」、「医療を受ける立場のものとして、看護師の方がこんなにいろいろ考えて下さっていると知り安心した」、「自分の経験からも、自分で自分を知ることや周りに理解してもらうことに苦勞した。また、内田先生の講義を聴きたい」などの声が寄せられた。他にも、「大学が地域に出て行って講座をおこなってはどうか。その方がたくさんの方が得られるのではないかと」言う意見が出された。回収されたアンケートの分析では、「満足」が8割近くにも達しており、好評だったことがうかがえた。

黒田裕子（本学教員：母性看護学講座助手・渉外委員）

平成17年度第2回公開講座：平成17年9月23日金曜日

Nursing Education from an International Perspective：国際的視点からみた看護教育

講師：Grace Stanley先生（症状看護学講座教授）

9月23日（金）、本学大講義室にて、第2回公開講座が開催されました。講師は今年度から本大学症状看護学講座に赴任された、カナダご出身のGrace Stanley教授によるものでした。当日は13時30分から約1時間半にわたり、テーマ「国際的視点からみた看護教育」についてご講演いただきました。

当日は、Stanley先生が5年間看護教育開発計画の一員としてパキスタンにおられた時に行った研究をもとに、パキスタンにおける看護教育に焦点を当てた内容のものや、カナダにいらした時の看護師としてのご自身の経験や研究に基づいたもの、またカナダにおける看護教育に焦点を当てたものでした。各国の教育システムの比較にとどまらず、むしろ、各々の政治状況、経済状態、文化に基づく考えや、様々な社会動向などの環境を背景にした国ごとの特性に応じて発展してきた看護教育についてお話していただきました。そして最後に、人々や社会の力となる専門性を持ち合

わせた看護教育の探究についてご講演いただきました。私たちがこのような機会において海外の現状をより知ることができたことによって、日本の看護について考えるときに、とても意義のある視点が得られたのではないかと思います。



当日は本大学近隣の方々はもちろんのこと、他県からや、本学の受験を予定している高校生まで、看護職のみならず、様々な職種、年代、学生や教職員合わせて60名余りのの方々がお越しくださいました。講演終了後には、地域の看護職の方や、本学卒業生などから活発な質問があり、さらに内容を深めることができたのではないかと思います。終了後のアンケートでは、7割以上の方より「満足した」といったお声をいただきました。また、ご感想の一部を紹介させていただくと、「Stanley先生のような外国人の先生の話聞く機会は限られるのでとてもよかった」、「看護という職業とその教育を、カナダ・パキスタンという異なる国の事情を比較して聞くことで、大きな概念で捉える機会となった」というものなどがあり、とても有意義な公開講座となりました。

吉田聡子（本学教員：看護教育・管理学講座助手・渉外委員）

平成17年度第3回公開講座：平成17年12月17日土曜日

英語になった日本語

講師：田中建彦先生（外国語講座教授）

日本独特の看護技術を海外に伝えようとする時に、英語にすることができない看護学用語や、英語にするとどうも意味合いが異なる言葉に遭遇することはありませんか？無理な英語に直し、伝えようとするのではなく、本来の言葉を使用し、認められるように努力する事が大切であり、それが日本文化を大切にすることにつながるのではないのでしょうか？今回の講座は、日本文化を海外に伝えていくことの大切さを実感し、勇気が得られた場であったようです。

みなさんはどのような英語になった日本語をご存知でしょうか？長い鎖国の間から現在までに約739語の日本語が英語になっています。

Sharawaggiという言葉は、日本語の「揃わじ」が英語になったものです。この言葉が英語の文献に始めて登場したのは日本が鎖国をしていた時代でした。長い鎖国の中に日本の科学技術は西洋にはるかに遅れをとっていました。ですが日本の美意識、宗教や道徳観などに関する言葉は西洋

との交流が閉ざされていた時代においても伝えられていたのです。明治維新の頃には、wakizashi（脇差し）、haori（羽織）など、芸術、武士道や衣食住に関連する多くの言葉が英語になりました。戦後になると、日本は目を見張るような経済発展とともに、世界の主要国家のひとつへと成長しましたが、dango（談合）、kuromaku（黒幕）、soukaiya（総会屋）など日本を揶揄する響きをもつような言葉が増えたようです。



また、左右相称、遠近法、黄金分割といった整然として安定した美しさに基礎をおく西洋の美意識に対して、日本美術が訴える美しさは、西洋の常識を打ち崩すものでした。「歌川広重」「鳥文斎栄之」は西洋美術に影響を与え、ゴッホ、マネ、ホイッスラーは、日本の美術の影響をうけています。そこには驚きとともに、一種の尊敬の念をもって日本を見ている外国の姿が垣間見えます。

今回の公開講座は、一般の方、学生や教職員を含め89名と多くの方に参加をしていただきました。講座終了後には、活発な意見交換がされ、アンケートには「日本の文化は自分が思うより、他の国に影響を与えているのだな」「日本文化を大切に必要性を痛感した」など多くの感想をいただきました。今回の講座は看護学に直接関与している内容ではありませんでした。しかし、日本独特の看護技術を海外に伝える意味で重要な示唆を頂いたように思います。

堀内美和（本学教員：病態・治療看護学講座助手・渉外委員）

（大学説明）

オープンキャンパス、鈴風祭における 大学説明

オープンキャンパスは、海の日7月18日（月）13：00～15：50に開催され、県内の高校生・保護者・社会人・取材者を初め、県外者の29名を含め282名の参加がありました。

当日のスケジュールは、①深山学長の挨拶、②安田教務委員長による本学の概要と平成18年度入学試験について、③学生部・平澤厚生補導員による学生生活について、④学生部・墨矢就職指導員による卒業後の就職状況について、⑤東風平講師による講話、⑥サモア国立大学の交換留学生2名の紹介等の内容で行われました。本大学はサモア国立大学と交流協定を結んでおり、サモアからの留学生を受け入れたのは今年が初めてであり、留学生（フェアとヘンリー）の紹介とともにサモアの踊りなどが披露され、サモ

アの文化に触れた楽しいひと時でした。尚、大学説明に対する会場からの質問としては、入試問題、奨学金、助産師の資格取得に必要な分娩立会い回数等に関する事が出ました。説明会後は、本学学生がツアーコンダクターとなり、15グループに分かれキャンパスツアーを行い、大学構内のキャンパス各所を見学しました。ツアールートには、公開に協力頂いた看護病態論演習授業(岩月教授)を組み込み、各領域実習室の説明とともに、廊下で次のグループが待つ程の盛況ぶりでした。当日は猛暑で、学内の冷房も追いつかない状況でしたが、案内した学生は屋外にも関わらず、参加者からの質問に熱心に答えていました。

秋に行われた鈴風祭においては、2日目の9月24日(土) 10:00~15:50に大学説明コーナーを設け、教務・厚生委員の各2名ずつの教員も含めて、看護教育や進学に関する説明を行いました。当日は、「芸人ライブ」に多くの参加者が釘付けになっていたようで、そのことも一因となつたのでしょうか、大学説明コーナーを訪れた方は24名と、例年よりも少ない状況でした。

藤垣静枝(本学教員:看護教育・管理学講座助教授・渉外委員)

(大学説明)

高校での説明・模擬授業、高校生の大学見学

高校での大学の説明や模擬授業、高校生の大学見学への依頼は、平成16年度より急に多くなっていますが、本年度は前年度を上回り、やむなくお断りしなければならないケースも増えている状況です。依頼時期も昨年より早く、新学期を迎えるや否や4月の大学見学の依頼を受け、各教員が多忙の中、説明担当の渉外委員が対応せざる終えない状況でした。その後も、県内の高校から多くの依頼があり、12月2日まで依頼総数25校で、19校に対応し6校はお断りを致しました。対応した内容の内訳は、大学説明会8校、模擬授業7校、大学見学4校であり、大学見学は高校1年生の総合学習の授業の一環として来校するケースが多くなっています。大学見学においては、実際に看護領域演習室の設備等を見学することにより、看護に対する理解も深まるようで、目を輝かせて見学する高校生の姿が印象的でした。これらの説明は全学を挙げて各領域の教員が快くご協力いただいたたまものです。また、高校での説明・模擬授業では、高校生だけでなく保護者の参加も多くなっており、子供の進路決定に関して保護者も直接説明を受けたいという要望が高いことが伺えます。

新年を迎えて、すでに、依頼が3件と3月まで予定が入っています。今後も、本大学のへ高校での説明・模擬授業、高校生の大学見学の依頼は高まると予想されます。これは、「看護職」への熱い期待や関心が高まっていることへの現われと思いますが、本大学として、いかに効率よく有効にこの任務を行うか、戦略的方法を考えていくことも大きな課題であると考えます。

藤垣静枝(本学教員:看護教育・管理学講座助教授・渉外委員)

(国際交流)

インドネシアから保健衛生グループ訪問

平成17年7月7日(木)の午前、インドネシアから保健衛生に従事する青年22名、お世話役の日本人スタッフが本学を訪問された。

この訪問は、平成17年度国際協力機構(JICA)の青年招聘事業プログラムの一環として行われるものであり、世界各国よりさまざまな専門職に従事する青年を招待し、日本での視察を通じて専門分野の知見を深め、国際親善に寄与する目的を持つものであるという。この度のデレゲーションは、昨年度のパプア・ニューギニアからの保健衛生グループ訪問と同様、駒ヶ根青年会議所、JICA駒ヶ根訓練所が中心となってお世話されていた。

9日間の日本滞在では、地域保健や医療施設見学などを中心にしたプログラムで東京、駒ヶ根に滞在し、本学では教員によるプレゼンテーションや学内施設見学を通して、主に看護大学のカリキュラム、地域保健・医療への取り組みなどが中心であった。

9:30に本学に到着した一行は、深山学長からの歓迎の言葉を受けた後、早速教員によるプレゼンテーションを受けた。



【挨拶をされる深山学長】

プレゼンテーションは3部からなり、はじめに教務副委員長の西垣内磨留美教授から「本学のカリキュラムの組立」についての概要の説明があった。次に、本学の地域保健・医療活動について看護実践国際研究センター・看護地域貢献研究部門の部門長である楊箸降哉教授から「本学の地域保健活動の紹介」について、そして異文化国際部門の副部門長の田代麻里江講師から「長野県在住外国籍住民への健康支援プロジェクト」についての発表があった。各プレゼンテーションとも発表15分、質疑応答5分という比較的短いものであったが、インドネシアからの参加者は発表に熱心に聞き入っており、一生懸命メモをとるなど真剣な様子うかがえた。



【プレゼンテーションに聞き入る熱心な参加者】

スケジュールの都合上、十分な質疑や討論の時間が取れなかったのは残念であったが、それでも時間を延長してのいくつかの重要な質問がかわされた。プレゼンテーションの後には、学内の施設を案内した。



〔訪問団の皆さんと記念撮影〕

短い時間であり、また過密なスケジュールの中での本学訪問であったが、この訪問が実り豊かなものであり、訪問団の皆さんの思い出に残るものであることを期待したい。最後に、このプログラムを行うにあたり、ご協力いただいた教職員学生の皆様に心より感謝申し上げます。

江藤裕之（本学教員：外国語講座助教授・渉外副委員長）

HP 担当からの報告

本大学の公式HPにアクセスしてみると、更新履歴や大学案内、学報、リンクページなど多彩なコンテンツもっていることがわかります。私はHP担当でありながら大学HPを見る度に、いったい誰が全体の管理をし、誰がどのWebページを更新しているんだろう？とっていました。私はこれまでに、「大学案内のページ」に含まれている「教員紹介のページ」を年に2回ほど更新作業をしてきました。しかし、この作業はHP全体の極一部にしか過ぎないのですよね。「コンピューターやネットのことなら何でも前田樹海先生に…」という想いを私に限らず他の教職員も抱いていることでしょう。実際に、前田先生がほとんどのWebページのメンテナンスを行っています。私は、この現状をなんとか打破しなければいけないなあと思い、まずは渉外委員長である那須裕先生、江藤裕之先生、ネットワーク推進委員長である前田先生とで「大学HPのメンテナンス」に関する話し合いを持ちました。そこで、大学HPに関する両委員会での役割を再確認しました。

渉外委員会における役割は、「大学HPを時節にあったもの、また魅力あるものにするために、定期的に内容を確認・企画・立案・原稿の収集すること」でありました。…ということは、私の思考だけではこの役割を遂行できるものではないなあ、と感じました。魅力あるHP作りは大学の発展にも関連することでもあり、とても重要な作業です。

来年度はネットワーク推進委員会との定期的な話し合いを持ったり、渉外委員会におけるHP担当グループメンバーで密な連携をとったりしながら、皆が「わあ〜！」と驚くような長野県看護大学のHPとなるように努力をしたいと思えます。

太田規子（本学教員：老年看護学講座助手・渉外委員）

〔ネットワーク推進委員会よりのお知らせ〕

すずらん寮から インターネット接続が可能に

きょうびの学生のケータイ所持率はほぼ100%ですが、固定電話回線（いわゆる家デン）を持っている新入生は珍しくなりました。ぼくらの大学時代は大学生協で電話加入権を購入することが一人暮らしを開始する象徴的行為だったことを考えると隔世の感があります。

さて、簡単なメールの送受信やケータイサイトの閲覧くらいならケータイで事足りますが、パケ代とか操作性、利用サービスの制限などを考えたら、コンピュータを利用するに越したことはありません。現在、個人的にインターネットを利用する場合、電話回線経由でADSL接続するのが最も一般的です。

しかし、家デンを持たない新入生の場合、どうしたらいいのでしょうか。そのひとつの答が今回の工事です。平成17年3月にすずらん寮（本学学生寮）と非常勤講師宿舍の各部屋にコンピュータネットワーク接続用のコンセントを敷設するとともに、本学の基幹ネットワークと光ファイバーで接続しました。

すずらん寮や非常勤講師宿舍からインターネットにつながるのに、もうプロバイダとの契約や電話回線は必要ありません。自分のコンピュータとLANケーブルがあればOK。最近のパソコンなら、コンピュータのネットワーク端子と部屋のネットワークコンセントをLANケーブルでつなぐだけですぐにインターネットに接続できます。LANケーブル（カテゴリ5以上のストレートケーブル）はエイデンや大学生協で入手可能。気になるお値段ですが、3メートルのもので500円程度です。

学内ネットワークに接続するメリットは、まず、接続利用料金が無料。親元を離れて一人暮らしの第一歩を踏み出した1年生諸君を強力にバックアップします。また、文献検索や蔵書検索などの学内向けサービスが利用できるのが夜間や休日に調べものをするに便利です。生活援助学講座のデジタルレポートも部屋から提出できるしね。Skype等のソフトを使えば、市内通話並みの料金で実家や世界中の友人に電話できるので、料金を気にしながら通話するのはもうおさらば。むしろ話し過ぎに注意していただきたい。

メリットを挙げればキリがありませんが、残念ながら紙面の都合上これ以上書けません。あとはもう、自分で体験していただくしか・・・。

前田樹海（本学教員：生活援助学講座助教授・ネットワーク推進委員長）

投 稿

グループワークを通しての学生の学び

水寄知子

日頃から地域の方々には、実習や学外活動を通して学生と関わっていただき、また本学教職員は教育活動のさまざまな場面で、少しずつ成長する学生の姿を目にしている。しかし、学内で行われている講義・演習については、普段あまり知っていただく機会がない。そこで今回は、学内・外の方々には生活援助学講座が担当している演習のひとつをご紹介します。

生活援助学講座では、初々しい1・2年生と「人々の健康や生活を支援する」ことについて学んでいる。夏休み明けの後期になると、ようやく大学生活にも慣れてきた1年生の授業では生活援助演習Ⅰが始まるが、その中で本学創設当初から取り組み、ほぼ恒例となっているのが小グループに分かれてのグループワークである。

10名前後で構成されたグループは、それぞれが1つの課題に取り組み、その成果を全員の前で発表する。今まで学生が取り組んできた課題は多岐にわたり、今年度は「ネット検索で信頼性の高い情報を得る方法」「青年海外協力隊は必要か」「プライバシーとは何か」「プロフェッショナルとしてのナースの身だしなみとは」など9つの課題が挙げられた。

事前に講座メンバーが集まり綿密な計画を立てたが、今回特に重視したことは、「複数の人々が1つの課題をじっくり考え、そこから1つの成果を生み出す—共に1つの作品を創造する—ことを体験する」ということだった。個々の学生にとってのこの「生み出す体験」を大切に、教員はその体験の過程をサポートする。つまり、このグループワークで行われたことは、知識の伝授ではなく、教員は学生の体験の導き手となり学生と教員が共に歩むことだった。

グループによっては、学外の施設や学内の教員へのインタビューを課題に取り組む方法の一つとしたグループもあった。突撃インタビューに近い学生の求めにも快く応じていただき、貴重な時間を割いてくださった方には、心から感謝申し上げたい。その過程で学生たちは、インタビューに際してのマナー（研究の倫理的配慮の“種”と言える）、質問内容を考えることの難しさ、インタビューに対する答えを理解し解釈することの重要性なども、学んだのではないかと思う。

ここでは、筆者が担当した2グループ—取り組んだ課題は、「看護はサービス業か」「相手の個性を尊重すること」だった—の「生み出す体験」をご紹介します。

「看護はサービス業か」のグループでは、“サービス業”という言葉に引っかかりを感じるメンバーもいたが、看護→病院→ホスピタル→ホスピタリティ→もてなすと連想し、患者さんもお客様であるから看護はサービス業と言えるという方向でディスカッションが進んだ。すると看護師の経験がある先生方にも意見を聞いてみたいとの提案があり、グループとしての見解を持ってインタビューに出掛けて

行った。インタビュー後、先生方によってもサービス業の捉え方が様々であることに驚いていたのが印象的だった。

ディスカッションの途中では、「看護って何なの？」ということにも話が及び、最終的に、サービスとは形のないものを提供することであり、受け手がいて初めて成り立つとの結論に達した。そして、サービスを提供する「看護」の特徴を際立たせるために、病院とホテルそれぞれの場所における一場面を演じ、それがビデオ撮影された。ビデオを作りたいという申し出を受けたとき、メンバーの発表に懸ける意気込みと結束の強さが伝わってきた。発表前夜は、何か物足りない、あんなに議論してきたのにあっさりまとまってしまったと不満げな様子で、遅くまで発表原稿を練っていた。そんなメンバーの意欲と粘り強さを褒めたいと思う。

「相手の個性を尊重すること」というグループでは、まず「個性」と「尊重」という言葉の意味を調べることから始めた。当然のことながら言葉の辞書意味は一般的すぎて、グループが求めている「これだ!」というような明確な答えが得られるわけではなかった。そこで、各メンバーが手分けして学内の先生方の意見を聞いてみるようになったのだが、返ってきた答えは、「質問が抽象的だし、難しすぎてすぐには答えられない」というものだった。ディスカッションのきっかけにするつもりで意見を聞きかかったのだが、実はメンバー全員で生み出さなければならなかった「答え」そのものを、先生方に求めていたのだということに気づいた。

改めて出発点に立ったメンバーは、何故このテーマを選んだのかを思い返し、グループとしてのひとつの結論を導き出したいと決意したようだった。最終的に、「個性を尊重する」とは「個人の性質・特徴を認めて、そのことについて考え、最大限の努力をすること」という結論に辿り着いたが、暗く落ち込み「生みの苦しみ」の中にあつたときも、途中で投げ出さなかったメンバーに拍手を送りたいと思う。

グループワークを終えた各グループのメンバーからは、「友人の新たな一面を知った」「一人ひとり考えが違うことを知った」「自分とは違う意見を聞くことで新しい自分の意見も生まれてきた」「形のないものを形あるものとして考えるのは大変だった」「過程」に大きな意味があった」「考える」ことがまず大切なことだと実感した」「一度テーマそのものから離れ、自分たちが将来どのような看護をしていきたいか意見を交わす必要があった」などの感想が寄せられた。

今回のような演習は言ってみれば、周囲の人と関わりながら生き、専門職を目指している私たちの大きな課題でもある。そのような問いに、二十歳前後の彼女たちが答えようというのだから、「頭の中がぐちゃぐちゃになる」のも無理はない。しかし、言葉を吟味し、自分たちの経験を見つめて理解しようと努め、自分たちの言葉でそれを表現しようとすることは、論理的思考・批判的思考を鍛えること以外の何物でもないと考えている。

(本学教員：生活援助学講座専任講師)

平成17年度卒業・修了予定者の進路状況について

平成18年1月31日現在 学生部就職指導課

本年度の学部卒業生は83名、大学院博士前期課程修了予定者は9名、博士後期課程修了予定者は1名です。

本年度の求人、求職状況の特徴を簡潔に述べさせていただきます。次のおおです。

①求人数は昨年度より60件も増加しました。職種別に見ると、毎年減少していた保健師の求人数が増加に転じました。看護師、助産師は相変わらず増加しています。②自治

体保健師の合格者は9名で、昨年の6名合格に比し5割増です。③県内への就職率は、全体の61.0%で昨年度より7%ほど高い。また、県内出身者の内、県内への就職率は75.0%でほぼ昨年並み、④進学予定者は3名。⑤個々の内定先では信州大学医学部附属病院に過去最多の7名、本学卒業生中最多就職数を誇っていた虎ノ門病院が0名、ということが目につきます。

1. 求人件数（求人を職種別にカウントしたもの）

設置者 ／ 職種		看護師	保健師	助産師	養護教諭	その他	計
病院	県内	42	15	23			80
	県外	428	66	238			732
小計		470	81	261			812
国・都道府県	県内	1	1	1			3
	県外	20	9	7	1		37
市町村	県内	2	11	1		1	15
	県外	13	10	8		1	24
小計		36	31	17	1	2	87
その他等 （企業）	県内	5	4	1		1	11
	県外	8	1	3	2	19	33
小計		13	5	4	2	20	44
県内計		50	31	26	0	2	109
県外計		469	86	256	3	20	834
合計		519	117	282	3	22	943

2. 進路内定状況

学部学生（83名）

地域／職種		看護師	保健師	助産師	進学	計
進路先	県内	32	10	5	0	47
	県外	25	2	3	3	33
計		57	12	8	3	80

（未定3名）

（主な内定先、複数のみ記載）

（県内） 7人 信州大学医学部附属病院 4人 佐久総合病院 篠ノ井総合病院
3人 伊那中央総合病院 諏訪中央病院 長野県立こども病院
2人 飯田病院 飯山赤十字病院 諏訪赤十字病院 上田市

（県外） 2人 岐阜赤十字 横浜南共済病院

大学院前期（修士）課程（9名）

大学教員 5人（県内4 県外1） 看護師 3人（県内3） 保健師 1人（県外）

大学院後期（博士）課程（1名）

大学教員 1人（県外）

2006年度 学 年 暦

前 期	後 期
4月5日(水) 入学式・後援会総会	10月2日(月) 後期授業開始
4月6日(木) オリエンテーション合宿(学部新入生・新編入生)	大学院履修登録(後期追加) 開始
4月7日(金) "	10月10日(火) 領域別実習(3年)
4月10日(月) 学内(履修) ガイダンス・定期健康診断	～12月8日(金)
4月11日(火) "	10月10日(火) 大学院履修登録(後期追加) 終了
4月12日(水) 前期授業開始・履修登録開始	12月18日(月) 冬季休業
4月19日(水) 履修登録終了	～1月5日(金)
4月21日(金) 修士論文研究テーマ提出期限(前期課程2年)	1月9日(火) 後期授業再開
5月1日(月) 創立記念日	1月12日(金) 博士論文提出期限(後期課程3年)
5月3日(水) 「憲法記念日」	1月19日(金) 修士論文提出期限(後期課程2年)
5月5日(金) 「こどもの日」	2月9日(金) 後期授業終了
5月8日(月) 領域別実習(4年)	2月12日(月) 学部・春季休業
～7月7日(金)	～3月30日(金)
5月15日(月) 博士論文研究計画書提出期限(博士課程3年)	2月20日(火) 修士論文発表会(前期課程2年)
5月30日(火) 博士論文研究計画発表会(博士課程3年)	2月21日(水) 大学院・春季休業
7月10日(月) 基礎・生活援助実習(2年)	～3月30日(金)
～7月21日(金)	2月27日(火) 博士論文発表会(後期課程3年)
7月10日(月) 編入2年次地域看護実習	3月中旬 卒業・修了式
～7月21日(金)	
7月17日(月) 「海の日」	
7月24日(月) 夏季休業	
～8月25日(金)	
8月28日(月) 前期授業再開	
9月11日(月) 総合実習【基礎・生活以外】(4年)	(参 考)
～9月25日(月)	2005年度 3月11日(土) 卒業式
9月18日(月) 「敬老の日」	2月23日(木) 助産師国家試験
9月19日(火) 総合実習【基礎・生活援助】(4年)	2月24日(金) 保健師国家試験
～9月29日(金)	2月26日(日) 看護師国家試験
9月23日(土) 「秋分の日」	3月28日(火) 合格者発表
9月29日(金) 前期授業終了	

長野県看護大学同窓会（鈴風会）からのお知らせ

向春の候、皆様方におかれましてはますますご健勝のことと存じます。鈴風会では、今年度から同窓会役員の顔ぶれが替わり、“会員のネットワークづくり”と“母校とのつながりを強化”という基本方針を立てて、新会長の頼もしいリーダーシップのもとで平成17年度事業計画に沿って活動を行っております。同窓会が充足してまだ3年足らずであり、まだまだ課題が多く皆様からのご意見やご助言をいただきながら母校の発展に寄与していけるよう努力してまいりたいと思います。

第3回 同窓会総会のお知らせ

日 時	平成18年3月9日(木) 12時40分～(予定)
場 所	長野県看護大学 中講義室4
内 容	今年度活動報告、来年度活動報告、今年度決算報告、来年度予算案、その他

当日は大学の研究集会がありますので、その合間を縫っての同窓会総会の開催となります。お忙しいと存じますが、ご出席をお願いいたします。尚、今回は会員の皆様からのご要望にお答えしまして、ランチョン総会を予定しております。人数分のランチ（バイキング方式）を準備しますので、総会にご出席される方は、総会のお知らせに同封してある出席確認ハガキを返信していただければ幸いです。

会費納入のお知らせ

同窓会は皆様の会費で運営されてます。終身会費で一万円です。振込み先は以下の通りです。

郵便局普通預金口座 口座番号：0581-1-79696 加入者名：長野県看護大学同窓会鈴風会

会費納入いただいた同窓生の皆様には、同窓会より記念品として「ロゴ入りはさみ」を差し上げます。

同窓会 豆情報 その6

前回の「豆情報その5」で今年度から就任した新執行部役員の紹介をしました。今回も引き続き3名の役員紹介をさせていただきます。

【副会長：原田慶子】

副会長の原田慶子です。よろしくお願い致します。修士課程の一期生です。現在、基礎看護学講座の教員をしておりますので、大学へもお出掛け下さい。お待ちしております。

【会計係：松下まゆみ】

会計を担当しています松下まゆみです。よろしくお願い致します。修士の4回生で、現在成人看護学講座で助手をしています。会計のお仕事では、会員名簿のメンテナンスや会報（学報）の発行等を行っています。

会計からのお願いですが、改姓・引越し・市町村合併などで住所を変更された会員の方がいらっしゃると思います。「大学の事務局内、同窓会宛」で住所変更のご連絡をお願いいたします。なお、ご連絡の際には学籍番号か、何回生または卒業年度を一緒にお知らせください。

【会計係：大脇百合子】

学部3回生で、現在は博士前期課程で学んでおります。同窓会が今後ますます発展していくことを目指し、役員の皆様とともに活動していきたいと思っています。どうぞ、よろしくお願い致します。

*ご質問・ご意見は、長野県看護大学同窓会（〒399-4117 長野県駒ヶ根市赤穂1694番地 Fax：0265-81-1256）まで

◆編集後記◆

学報21号をお届けします。学期末試験や入試業務でお忙しいなか、ご執筆・ご投稿いただきました皆様方には心より感謝申し上げます。今回は、教員の活動報告のページが前号よりも充実したものとなっております。来年度は委員会メンバー改編の年ですので、今号をもちまして、現編集メンバーでのお届けは最後となります。次号は、また新たな編集メンバーでさらに読み応えのある学報をお届けできるように、キチンと引継ぎをします。今後ともどうぞ学報への投稿をよろしくお願い致します。

渉外委員会学報担当：江藤裕之（編集長）・太田規子・吉田聡子